

健康文化

悩ましい選択

高田 健三

いつも年末になると、今は東京に住んでいるが、もともと京都市育ちの家内の従兄から“千枚漬け”の届くのが楽しみなのである。と言うのも、今ではデパ地下の専門店街に出ている、京都で大手の漬物屋のものとは一味違う、知る人ぞ知る店のものだからである。それが暮れの28日になっても届かないので、少し気になり出していた。ここ十数年来、何時も20日過ぎ頃の“定期便”なので、それが来ないというのは先方に何かあったのではと思われるからである。私たちの年輩になると、いつもより長く音信がないと、病気入院していたりすることを後で知ることが屢々ある。とは言っても、親しくても普段あまり電話のやりとりをしている訳でもないのに、如何お過ごしですかと訊くわけにもいかない。

12月中頃に送ったこちらからの“定期便”については、従兄から礼状の葉書が来ていた。今までは何時も奥さんから電話があるのに、今回だけは違うのがおかしいと家内はいう。家内の従兄は三浦朱門氏と親しく、そういったこともあって従兄の奥さんは時折、三浦氏夫人曾野綾子さんの、発展途上国での色々なアクティビティに同行することがあるという。もしかすると今回はそれで留守かもしれないと思ったりする。それならば一言、葉書に書いてあってもおかしくはないと考えたりしてしまう。電話に拘るのは、生の声でいろいろ話をすると、お互いの近況が確かめる合えるからだという。

やはり、奥さんがどこか悪いのではと気をもみ始めた28日の夕刻、宅急便が届いた。樽包みを抱えて玄関先から戻ってきた家内は、電話をかける切っ掛けが出来たとほっとした様子であった。頃合いを見計らって電話したところ、気にしていた奥さんの元気な声が出て、久しぶりに話が弾んでいたようであった。特別な事も無かったようで、一件も落ち着いて、今回の千枚漬けは一層美味しく味わうことができた。

京都というところは名産に昔から漬物がある。それぞれ好き嫌いはあるが、失われ行く日本固有の食文化の中にあって、昔ながらの伝統の味には郷愁をそそられるものがある。近畿地方の都市周辺の農作は、古くから稲作よりも収益性の高い野菜類の栽培が盛んであったという。その事が今日、特に京都の伝統

野菜として受け継がれ、京料理や漬け物として、独特の食文化を支えていると
いうことができる。

しかし今は、バイオテクノロジーの進歩によって農業技術も飛躍的に発展し、
それに流通革命も加わって、全国から、海外からも色んな種類の野菜や果物類
が、“何時でも何処でも”手に入る時代となった。スーパーなどの生鮮食品売り
場には、何時も色とりどりの果物や野菜が溢れているが、生産効率などから品
種が均一化されてきた結果、味にも地域特性が失われてしまったものが多い。
今は、食卓の上で季節を感じ取ったり、舌に広がる味覚から産地に思いを馳せ
ることも少なくなった。

そんな社会情勢の中、京都府はこの地方に多くある、伝統野菜の品種の保存
や復活に力を入れているという。具体的にはどんな政策が執られているのか知
らないが、形式にとらわれことの多い役所仕事にしては、地味ではあるが、地
方文化に腰を据えた政策であると思う。その品目はというと、だいこん、かぶ、
つけ菜、なす、かぼちゃ、とうがらし、うり、さといも、ごぼう、ささげ、う
ど、みょうが、ねぎ、せり、くわい、たけのこ、じゅんさいの17種(imidas、
'04、集英社)にも及ぶというから驚きである。これぞ京都人のこだわりと言
うべきか。他府県でも見習うべきものがある。

これらの中で、我が家が毎年恩恵に与っている物がある。先に述べた千枚漬
け(かぶ)の他、たけのこ(筍)である。京都の筍はあくが少なく、軟らかで
甘みが深い。生のまま刺身造りにスライスしても食べられるし、皮付きのまま
焼いた物は格別の味わいがある。その他の地方の物に較べて値段も格別である
が、ただ珍しいと言うことだけで高価な物と違って、その値段を裏切らない品
質であることは間違いない。良いものにはそれなりの対価を払うのは当然であ
る。幸いにも我が家には、毎年シーズンになると、家内の友人の兄弟で、京都
在住の人から自家竹林産と言う朝堀り筍が、その日のうちに速達宅急便で届く。
これぞ本当の贅沢というもの。厚意に感謝しながら最高の幸せを味わう一時で
ある。

最近の新聞に、文化庁は次の通常国会に、文化財保護法の改正案を提出する
と言う記事が出ていた。約30年ぶりのことらしい。新しい概念で文化財をとら
え、絶滅の危機にあるものを保護するのがねらいである。項目の中の民族技術
の分野では、刺し子(青森)、杜氏(新潟)、船大工(静岡)、鮎ずし(滋賀)、
くぎ鍛冶(京都)などが挙げられているという。その他、文化的景観も指定す
ると言うが、何事についても、我が国の行政はスピードが遅い。30年近くの年
月の間に、どれほどのものが衰退し、失われたであろうか。役人は、ユネスコ

の世界遺産への登録は勿論であるが、それと同時に国民の身近にある文化財、民族技術の保護、支援にもっと力を注ぐべきである。

しかし、こういう問題は、ただ国が指定してすむことではない。国と地方自治体と当事者の三者の積極的な合意の上での政策が、一般受益者に受け入れられなければ実現は難しい。伝統野菜についての京都府の取り組みは、行政と生産者と消費者（受益者）の“三位一体”だから成り立つのである。我が国特産の野菜に対する価値観を共有するための運動としても、今後も在り続けてもらいたいと思う。

一方、今から二十年ほど前、イタリアのトリノに住む男性が声を挙げた‘スローフード運動’は、我が国でも現在、静かな広がりを見せている。政治、経済、科学など総ての社会現象が目まぐるしく動く中で、成功者に成るためにも、或いはまた落伍者にならないためにも、現代人は寸暇を惜しんで頭脳を使い身体を動かさなければならぬ。勢い“食事”が疎かになり勝ちになる。昼食に十分時間をとり、ちゃんとした食事を摂るイタリア人にすれば、アメリカ食文化の象徴とも言えるハンバーガーやフライドチキン等のファストフード(fast service food)の進出は、我慢できなかつたのであろう。

注文すれば直ぐに出てくるファストフードは、子供や忙しいサラリーマンの間に受け入れられ易く、世界的な現象でもある。しかし、単一食材の大量消費、画一的な調理法による食品の日常生活への浸透は、伝統的食文化の崩壊につながり、健康への影響も無視できない。それに対する警鐘として、従来からの食文化の良さを見つめ直そうと、“ファスト”の対語の“スロー”をキーワードにした運動がその始まりと言う（知恵蔵’01、朝日新聞社）。トリノが先か京都が先かは知らないが、そこには互いに共通するものがある。

“食事ぐらいはゆっくり摂ろう”という“スロー”の理念には、あくせくと経済的豊かさばかりを追わず、本来の食文化の良さを見直し、自然回帰を目指すゆったりとしたライフスタイルが浮かんで来る。昨今、話題に上る“スローライフ”とは、そんなニュアンスの生活なのである。そんな時流に乗って、どこそこの料亭では、ゆったりとした佇まいの中で、四季折々の厳選された素材の料理を楽しむ事が出来る、或いは、山間の森の中に佇むこの宿は、自然と共に時間を忘れさせる癒しの空間である、と言った紹介記事やテレビの番組が、時折、目に付くようになった。厳しい競争社会の中で、日々すり減らしている身体を休めるには、時にはそうした上質な“非日常”も必要であろう。

しかし、それには“時間と懐”の余裕が必要であり、おいそれとはいかない。好いにつけ悪いにつけ横並び意識の強い日本人は、人を見ると自分だけが置い

てゆかれたような気にもなる。そこにタイミングよく出たのが、2003年度のベストセラー本に選ばれた、森永卓郎著『年収300万円時代を生き抜く経済学』である。歴史的なデフレの中、年々給与がカットされてゆくサラリーマンの不安感を、巧みに掴んだ表題である。

著者は、近い将来、日本は新しい階級社会に移行すると予言する。それは一握りのスーパーリッチ層、年収300万円クラスの一般サラリーマン層と、100万円クラスのフリーターの職業層からなる社会構造であると言う。しかし、実質的にはスーパーリッチとそれ以下の二極分化であろう。嘗ての“中産階級”という自己満足的な言葉は、日本経済史の中にのみ残るのであるだろうか。しかし著者は、そんなサラリーマンを励ますため、年収300万円はグローバルスタンダードであると説き、色々な例を紹介しながら、物心共に豊でゆとりのある生活が楽しめることを強調する。

読んだ人がどう考えるか、“頭”では理解できても、“身体”でついて行ける人がどれほど出てくるか興味のあるところでもある。一旦知った甘き都会生活の味は、そうそう容易には忘れられるものではあるまい。著者も、本人の決心次第と念を押している。本来、この種の本は、読者のフラストレーションの解消に役立てば十分である。しかし、これから人生の将来計画を建てようとしている人には、項目の一つに加えて置いても悪くはないであろう。

先日、東北地方の山間の、とある湯治場取材したテレビ映像を見た。宿の客の大半は、一年の収穫を終えた農家の人達であった。みんな長期滞在型で、食料は勿論、中には布団も持ち込んで来る人もいるという。食事は自家用に栽培した、無農薬有機栽培の米や野菜類を中心の、自分好みの手料理なので、特に日常生活と変わったところはない。肉類や魚介類が欲しければ、宿に頼めば取り寄せてくれる。その上、何時でも温泉に浸かれるのだから、そんじょそこの都会人の別荘暮らしより、余程充実した内容にみえる。田舎暮らしは、森永氏が勧める生活様式の一つであるが、農村の人達は昔から、スローライフそのものの“日常”の中に暮らしているのである。

大都会に住み、激しい競争社会に勝ち残り、気ままに上質で優雅な“非日常”を楽しむ生活スタイルを望むか、先細りのサラリーマン生活に耐えても、都会生活に固執するか、自然の豊かな地方に住み、新しい価値観に立って自分の幸せを求める続けるか。これからの人には悩ましい選択である。(2004年1月)

(名古屋大学名誉教授)